



2023 年

3 月 第 3・4 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 3 月 1 9 日 : ヨハネ福音書 12 : 1 - 11 .

『 ベタニアの晩餐 』

・ 3 月 2 6 日 : ヨハネ福音書 13 : 1 - 11 .

『 足を洗われる者たち 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

エルサレムの東南東、約3 Kmに位置していたベタニアにはマルタ、マリア、ラザロの住む家がありました。彼らはナザレのイエスの知人であり、イエスはエルサレムを訪れるついでに、彼らの家によく立ち寄っています。もしかしたら宿泊したこともあったかもしれません。

最後の晩餐はエルサレムのどこかの（マルコの母の？）家で開かれました。その一日前の夜に、最後の晩餐とはまた別の夕食会がベタニアの「マルタの（住む）」家で開催されたとするのがマタイとマルコの福音書の見解です。

しかし、ヨハネ福音書では、これは一日前ではなく、前週の終りの、エルサレム入場の前の夜であったと、説が分かります。因みにルカ福音書ではこのエピソードをイエスの受難の1年以上も前の出来事としています。

さて、その年（紀元30 or 29年？）の過越祭とその前後のことに一番詳しいのがヨハネ福音書です。その記録によると、ベタニアの家の夕食会のために各地から、三々五々連れ立って集まって来た人々の中にイエスの姿もありました。また、そこには住人のラザロもいて「彼のために」宴会が催されたとあり、「彼」がイエスなのか、それともラザロなのか、原文でははっきりしません。その後すぐにまた「ラザロがイエスと共に座った者の中の一人」だったと念を押されているので、著者の頭の中では少なくともこの二人はその晩の中心人物だったことがわかります。

さて、ラザロはというと、数日前に、一度病死しており、自分の墓の中から、イエスの声に呼び戻されて命を得、再び生きる者となったばかりでした。

姉のマルタはその晩も来客の接待をとりしきっていたようですが、妹のマリアはというと黙々と客人の食卓を整えていたわけではなく、姉とはまた別の行動をとっています。何をしていたのでしょうか？

家事に疎い彼女は、大切にしておいた高価なナルドの香油を家の奥から取り出して来て、それをイエスの足に塗り、自分の髪の毛で拭っていたのです。誰一人、予想だにしなかった彼女の行動は、その香油の強烈な香りが部屋中にひろまるとともに、一斉に衆目の的となります。彼女は、死んでいた家族（ラザロ）に、再び命を与えてくれたイエスの愛とその救いに感謝の言葉もなく、それが予想外の行動となって表出していたのです。

ならば今度は、油を注がれたイエスの反応に、一同が注目します。しかし、その場の一時の沈黙を破ったのは、イエスではなく、彼の弟子の一人の（イスカリオテの）ユダでした。

どうして、その香油を300デナリオンで売って貧しい人たちに施さないのか。

彼は突然、心にもない社会福祉の精神をここで披瀝します。ユダは、イエスの日常の奉仕活動には興味がなく、同行していなかったようです。そんなユダをよく知る人々は、彼の発言に眉をひそめたであらうでしょう。イエスは、ようやく重い沈黙を破って語り始めます。

その貧しい人々なら、いつでもあなたがたのそばにいるではないか。

誰かを助けたいのなら遠慮なく、進んで行動に移せばよいだけの話です。大金をあてにして後から始めるようなことはありません。さて、イエスはマリアのしたことを弁護することも忘れません。

この人の行動をさまたげてはならない。私の葬りの日のために（香油を）取っておいたのだから。

イエスはこの6日後に処刑される運命にあります。ユダヤの習慣に従えば死後、遺体に油を塗ります。マリアの香油のおかげでイエスの“生前葬”がこの時に、成立していたことを、まだ誰も知りませんでした。

《 足を洗われる者たち 》

神の手の温もりが、その独り子の手から、弟子たちの足へと伝わります。その手の感触は彼らの足先に、一生残り続けることになるでしょう。受難週の洗足の木曜日の出来事の詳細はヨハネ福音書にのみ記されています。

創世記の第1章の天地創造では、神が命じて無から有（森羅万象）が出現しますが、第2章で初めて神が、その手によって人を創造した時の手順

が明かされます。

神である主は土の塵で人を形作り、その鼻に命の息を吹き込まれた。

(創世記2:7)

間違いなく神は、ご自身の“手”によって、人を形作られたと。また、ヨブ記には、つぎのように記されています。

あなた(神)の手が私をかたどり、私を造ったのに、あなたは…

(10:8)

神から懲らしめを受ける人は幸いである… 神は傷つけても、また包み、打っても、その手で癒してくださる。

(5:17-)

このように、神の“手”を、人間が身近に感じてきた長い歴史の記述は聖書のあちこちに見られます。

さて、一番“最後”に神がその手を人に見せたのは、疑い深い弟子のトマスに対してでした。それは十字架に打ち付けられて釘穴が開き傷ついた手です。思えば、イエスはその手で彼らの足を洗われたのです。その手が、人から懲らしめを受け、傷つき、血潮をしたたらせていたのです。

復活したキリストにその“手”を見せられた弟子たちは、我が身をもふり返し、さぞかし人間の業の深さを思い知らされたことでしょう。

時間を巻き戻すと洗足の夜に、弟子たちは足を洗われた時、困惑します。その時イエスはリーダーのペトロに対してこう言いました。

私のしていることは、今あなたには分からないが、後で、分かるようになる。

もし私があなたを洗わないなら、あなたは私と何の関わりもなくなる。

(ヨハネ福音書13:7・8)

弟子たちは、その夜のイエスの言葉と手の温もりを一生忘れることはありません。さらに、復活者のその“手”に深刻な傷跡を見たことも。

キリストの手は、彼らに先立ち、未来に向かって、彼らを力強く導き、困難に立ち向かわせ、また、労苦を癒してくださることでしょう。その御手のために、やがて彼らは、自らの命をささげることになるでしょう。